

北海道今金高等養護学校 R7 第2回学校運営協議会（コミュニティー・スクール）記録

開催日時	令和7年10月27日（月） 10時00分 ～ 11時30分		
会 場	北海道今金高等養護学校 会議室 視聴覚室		
出席者数	10名		5名（事務局）
出席者名	A 北海道教育大学函館校 教授 B 北海道今金高等養護学校 PTA 会長 C 今金町教育委員会 事務局長 D 今金町校長会 会長 E 相談支援事業所相談室ひかり 相談員 F 今金町保健福祉課 保健師 G 今金町商工会女性部 部長 H 今金町農業協同組合 青年部顧問 I 寒昇町内会 会長 宮崎 宏美 北海道今金高等養護学校長	教 頭 伊 東 実 事務長 児 玉 崇 志 教務部長 西 村 信 隆 進路指導部長 大 倉 正 也 支援部副長 横 畠 かれん	
内 容		記 録	
1 開会の言葉	教 頭	（要約）今回は分科会に分かれて、それぞれの協議の柱に沿って話し合われる。それぞれ活発な意見交換を期待したい。	
2 会長挨拶	A 会長		
3 学校経営及び学校運営の進捗状況、学校の近況	校 長	9月末で、函バス「快速瀬棚号」の廃線となったが、新しい路線には、生徒は問題なくスムーズに移行できている。 2学期は生徒の現場実習が行われている。これまでの学習の成果を生かした有意義な実習をしている。 - 先日のマラソン大会は、今回のような形での実施は、今年度で最後となった。 - 校地内の写真動画の撮影について、最近の社会の情勢や道教委通知等を踏まえ、ガイドラインを検討している。個人情報に留意し個人のスマホでの撮影の制限等。 - 働き方改革推進校として2年目となる。近年の超過勤務時間の推移をみると、大きな変化はないが、少しずつ改革が進んでいる。今年度、時間割の見直しと、業務の精選作業を進めている。 - 開校30周年事業に向けて、準備を進めている。次年度の開校30周年は地域と共に喜びを分かち合うコンセプトで、なるべくコンパクトに行っていく。町民やPTAとも相談しながら考えていく。	
4 テーマ別分科会		※ 各分科会毎の記録を参照	
5 分科会内容の共有		各分科会から、記録を要約した内容を報告した。	
6 校長挨拶	校 長	様々な貴重なご意見をいただいた。一つでも実現できるように今後検討して参りたい。	
7 閉会の言葉			

学校運営協議会 学校経営・教育活動連携部会 会議録

開催日時	令和7年 10 月 27 日(月) 10:40～11:10	
会 場	会議室	
出席者数	学校運営協議会委員 5名	学校 2名
出席者氏名	A (北海道教育大学函館校教授 学校運営協議会会長) B (PTA 会長 保護者) C (今金町教育委員会 事務局長) D (今金中学校長会会長 今金中学校長) 宮崎委員(北海道今金高等養護学校長)	教 頭 伊東 実 教務主任 西村 信隆
記録		
<協議の柱> ○社会の変化に伴う、これからの本校生徒に求められる資質・能力及び職域の資源をいかした教育活動と持続可能な地域との協働・連携について		
1 年間授業時数の是正と時間割の作成 (1)「職業」の新設の検討 ア 資格取得に向けた学習の展開(ICT 機器の活用) イ 生活単元学習／総合的な探究の時間と連続して設定することで弾力的な運用が可能。 ウ 模擬株総会の活動との連携。		
2 模擬株式会社委員会の見直しについて (1) 事業内容の精選。 (2) 企業と連携する。母体を企業とし、その中で教育活動を行う。 (3) 学校は「働くこと」を教えらるのか。教師は学校以外で働いたことがない人が多く、働くことを教えるプロではない。その点を踏まえて、ものづくりをとおして生徒に何を学ばせたいのか、その学んだことは社会で役立つのかを考える必要がある。		
3 働き方改革 (1)「思い込み業務」の見直し。 ア「この業務(学習活動)は生徒のためになっているはず」という思い込みから脱却し、これを振り返って客観視することが大切である。 イ「働き方改革＝教育改革」と捉える。これまで行ってきた業務(教育活動)の目的はそのままに、方法を変えることが必要だが、その手段を考えないとならない。		
4 地域との連携 (1) 学校と地域がともに育っていく必要がある。 (2) 今金高等養護学校の中に NPO 法人をつくる、のような大胆な発想が必要か。 (3) 町と学校と一緒にできるイベントはないか。地域のイベントに本校の行事を重ね、参画することがこれからの在り方ではないか。 (4) 親にも「学校ってこういうところ」というイメージものをもっている、ので、行事の精選については保護者に丁寧な説明が必要。 (5) 行事を計画している人は業務、参加している町民はボランティア、その関わり方の差により、同じ活動に対してもそれぞれの意識が違うため、そのすりあわせが必要。 (6) 放課後、寄宿舎の余暇時間で町内の施設を活用してほしい。町民と顔を合わせることができると良い。町内で行っている活動を生徒に紹介する。 (7) 地域との連携の具体的な情報を保護者に向けて発信してほしい。保護者としても、自分の子どもを地域に任せて大丈夫という安心感を求めている。		

学校運営協議会 地域就労・特別支援教育地域推進部会 会議録

開催日時	令和7年10月27日（月）10:40～11:10	
会場	視聴覚室	
出席者数	学校運営協議会委員5名	学校 3名
出席者氏名	E （相談支援事業所ひかり 相談員） F （今金町保健福祉課 保健師） G （今金町商工会女性部 部長） H （今金町農業協同組合 青年部顧問） F （寒昇町内会 会長）	事務長 児玉 崇志 進路指導部長 大倉 正也 支援部副部長 横島かれん
記録		
<協議の柱> （1）本校における進路指導、卒後指導の部分を共有し、今金町との関わりの中で本校卒業後の安定した就労をしていくための今後の体制整備について（就労支援事業、今金町企業、農福連携、林福連携、その他）		
○本校の進路指導の現状（大倉） ・本校の在籍生徒はほとんどが町外生で、卒業後はコロナの影響もあってか地元に戻る傾向がある。GHは、今金町だけでなく周辺地域を含めて飽和状態にあり、3年生の4～5月時点で来春から利用できるかどうか交渉が必要だが、卒業まで1年間空けておくことは難しい場所が多い。進路実現には、生活の場が必要になるため、難しい状況ではあるができるだけ希望に沿えるよう尽力している。 ・今金町へ人材を残すことについても、生活の場の確保が課題となる。町内の企業も障害者雇用に関心を高めていることをお聞きしているため、つないでいけたらと考えている。		
○今金町の現状		
①農業（H）		
・農業はかなり人手不足で、米とじゃがいもの時期が重なると特に厳しい。 ・機械を扱う仕事が多いため、任せられる仕事内容が限られてしまう。ハウスやミニトマトに関する作業であれば、外国人労働者の派遣をしているため、障害者雇用も同じように進んでいけばと考えている。 ・農業は、冬場の仕事がないため、通年での雇用が難しい。また、生活の場がないと継続して働くことも困難である。学校、福祉、農家、町とで歩み寄り協力し合うことが求められる。		
②林業の6次化（H）		
・有効な資源は多いが、活用の仕方について町からまだ具体策は出ていない。木材源や観光資源としてなど、事業が確立していけば雇用の拡大につながるのではないかと考える。		
③空き家について（I）		
・町内に空き家が多いことも問題となっている。空き家を整備して、就労を希望する人の生活の場として活用する道があるのではないかと。現段階でも、外国人労働者が利用している実例がある。ただし、一人で生活していけるだけの能力が必要になる。		
④GH、事業所について（E）		
・福祉事業所や光の里自体も人手不足となっている。GHの世話人も少なくなり、高齢化している現状がある。 ・光の里のGHも現在満床となっている。空き家の活用においては、高校卒業直後の人であれば尚更生活能力を身に付ける必要がある。生活能力を身に付ける支援をするためにも、まずは人手が必要。自立に向けて時間を掛けて行いたいことだが、利用者もすぐに地元や大きな街へ行ってしまう例が多い。		
○若い世代の安定した就労に向けて		
（E）		
・町内外の事業所だと、i企業（今金町）は冬場の仕事があり、F福祉事業所（せたな町）も施設内外で広く仕事ができる。農家での季節雇用と福祉サービスの併用により、通年で働くこともできるのではないかと。B型事業所の工賃では経済面は安定しないため、町からの補助など協力を得ることが必要になる。		

(I)

- ・若い世代がすぐに今金町を出てしまう要因として、遊ぶ場所（エネルギーの発散の場）がないことがある。娯楽施設や商業施設は無くても、何か発散できるような環境整備も重要になる。
- ・卒業後、社会に出る前に訓練ができるような、クッションになる場所が必要。

(E)

- ・高等養護の生徒は、単身での生活（自立）を見据えて学びに来ている。GHや福祉の領域が、卒業直後の訓練施設のようなはたらきを担えたらと考える。

(G)

- ・仕事を継続するにはその職に対する適性が必要。例えばO食品のような業務であれば、朝起きられるか、機械が得意であるかなど。早朝の仕事が合わなかった人が、自分に合った時間帯で働ける場所を見付けたことで、今も長く勤務できているケースがある。
- ・学校にいる段階で自分に合った仕事を見極めることは難しいと思うが、様々な経験をとおして適性を知ってほしい。

(E)

- ・学生が地元へ戻ってしまう理由の一つとして、保護者の意向が強いことも挙げられる。時代の流れもあってか、親の元に子どもを置いておきたい、子離れができない傾向がある。
- ・親元を離れて暮らしたり働いたりすることを想像するだけでは危ないと思ってしまうため、体験をするなど保護者も安心できるようなサポートも必要になってくると考える。

(E)

- ・障害のある子どもは、親も力が弱い場合が多い。そのような家庭は親子で共依存の関係になっており、親子同時に支援しなければいけないが、どの場面で切り込んでいけば良いかが難しい。
- ・仕事を辞めたいと思っても、特性上自分の意思を伝えることが難しい人もいる。「最近行きたくない」など一言でもいいので周囲へ伝えられるような環境づくりも必要である。
- ・仕事を辞めなくなったら、町内でも自分に合った別の仕事に移れるような環境になれば良いと思う。小規模の町だからこそ、町内の企業間で連携することができるのではないかな。都会にはない、一人一人への理解の得やすさがこの町にはあると思う。

(I)

- ・今金は、町側は人手を欲していて、学校側は就労先を探す生徒がいる環境。この特有な環境を生かして、空き家の活用なども含めて町に提案していくことも一つの手ではないかな。

(H)

- ・農家も人手がほしいと言っているが、受け入れる側が障害のある人へのサポートの仕方や体制について勉強していかねばいけないと感じた。
- ・農業の大規模経営では機械化が進んでいるため、そのような分野が得意な人も必要になっている。土の中での作業や力仕事は苦手でも、運転やスマートフォンの操作、危険察知ができれば充分農業ができる。そのような訓練や教育も進んでいけばと思う。